



冒険のはじまり ～旧統一教会 元2世が起業家として歩む「哲学」の道～

上館, 誠也

(Citation)

哲学対話と当事者性：2019-23年度科学研究費補助金基盤研究(B)（課題番号19H01185）「哲学プラクティスと当事者研究の融合：マイノリティ当事者のための対話と支援の考察」研究成果報…

(Issue Date)

2024-03

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100486374>



冒険のはじまり

～旧統一教会 元 2 世が起業家として歩む「哲学」の道～

上 館 誠 也 (株式会社 ShiruBe)

はじめに

私は哲学研究者ではない。それどころか、学部すら哲学に関連してない。哲学については、普段は 1 文字も書き記すこともない、全くの門外漢である。しかし、哲学の実践者として生きてきた自負がある。ここで紹介する活動は、もしかしたら伝統ある由緒正しき「哲学」の領野に土足で上がることになるかもしれない。純粋に叡智を探索する賢者達を愚弄するかもしれない。それでも信じてほしい。この土足は、いずれ轍とならんことを。新たな哲学の可能性を、私はこの世界に切り拓いていきたい。野蛮な実践者が描く無謀な冒険譚のプロローグをここに書き記していく。構成は次の 3 つである。

- ① 過去編：なぜ「哲学」で起業したのか？
- ② 現在編：いま「哲学」で何をしているのか？
- ③ 未来編：今後「哲学」でどうしていきたいのか？

それでは、駄文に少々付き合ってもらいたい。共に草をかき分け、道なき道を進む心づもりでお目通しいただきたい。

① 過去編：なぜ「哲学」で起業したのか？

全く関連はない、しかし実践者としての自負がある。そんな者がなぜ「哲学」と関わることになり、その道を志したのか、最初に述べることからはじめよう。私にとって「哲学」は、第一に幼少の頃からの私生活における影響、第二に企業への就職を経て自らのキャリア形成を築くうえでの影響と、大別してこの 2 つの関わりがあった。その出来事を次に示す 2 つのパートに分けて、それぞれ紐解いていくことにしよう。

＜プライベート編：私は「哲学」に救われた＞

＜キャリア編：多くの企業はカルト化している＞

＜プライベート編：私は「哲学」に救われた＞

時々みる「夢」がある。――私は暗闇の大海原でひとり佇んでいる。突如、天候が変わり、それまでさざなみだった海面に、大波が立ち上がる。為す術もなくのみこまれ、深海へと吸い込まれていく。必死でもがくが、上も下もわからない。諦めがついた頃には底をつき、沈殿している。冷たく、全身を押しつぶす水圧を感じる。これが、文字通りの「絶望」なのであろう。しかし、そのとき海底に光が差し込む。その光が導きの糸となり、海上まで急速に浮上する。酸素を全身で取り込み、そして私は覚める。――

少し夢の話が長くなってしまった。夢でみる「光」が私にとっての「哲学」である。少なくともそう解釈するに至る経験がある。哲学で起業した理由を1つだけに絞るなら、「哲学」に恩返しをしたいという思いである。そこに尽きるかもしれない。具体的にご紹介しよう。それは私の出生に関係する。1991年10月13日山形県で生まれ、すぐに山口県の下関市に引っ越す。両親は旧統一教会の信者である。いわゆる合同結婚で結ばれた敬虔な信者だ。毎晩20時には教典を家族で読み祈る。日曜日には礼拝に行く。先祖を地獄から救い出すために、多額のお金を教会に注ぎ込む。彼らにとって、その活動にどんな意味があるのか、その深層心理は理解できていない。いや、理解したくもないというのが正直なところか。そのように思いはじめたのは、物心ついた小学2年生の頃である。

きっかけは「異性と5メートル以内に近づいてはならない」という行動指針が、どうも当時の私には受け入れ難かったことだ。そう、好きな女の子ができたのだ。毎日学校で顔を合わせるのが楽しみで仕方なかった。この気持ちを「悪魔が入った」などと断罪されては、生きている心地がしない。私は心に決めた。「この親をなんとか説得してみせたい。お前達はおかしい。間違っている」と。そう伝えるための何かをもとめていた（ある意味では彼らにとっての「悪魔」が入ったのかもしれない。そう、「理性」という名のそれが）。

学校の図書館の本を読み耽るようになった。特に好きだったのは偉人伝だ。キューリー夫人もマザー・テレサも統一教会の信者ではなかった。しかし、彼女らは確実に世界をよい方向へと動かしていた。たしかに、それが事実かどうかは証明のしようがないが、少なくとも多くの現代人はそう捉えているはずだ。その事実が私にとっての突破口だった。そこで気付いたことがある。多くの偉人たちが、それぞれの方法で世界を平和にしようと努力している。その山の登り方こそ違うが、彼女らに共通しているのは抽象化すると「世界平和」的なゴールを目指している点である。そう思えた時に、私は両親と自分とを相対化することができた。彼らの登り方は「統一教会」という山道であったが、それは私には明確に違うのだと。そして、その判断はおそらく間違っていない。なぜなら、歴史の偉人達の存在がそれを証明しているからだ。宗教的盲信ではなく、彼らが生き実践してきた道こそが、私の存在を証明してくれる、そう強く思えた。「統一教会」だけが唯一の山の登り方という両親の主張への、明確な判例とな

【冒険のはじまり】

るのだ、と。

中学生になると、いよいよその思いに拍車がかかる。きっかけとなったのは、いつも眠気と戦いながら受けていた歴史の授業だ。おもしろくもない小ボケを挟むおじさんが放ったのは「神は死んだ」というパンチラインであった。全身に稲妻が走った感覚を今でも明確に覚えている。「統一教会」と訣別する武器を手に入れたのだと直感した。エクスカリバーとしての「哲学」を私はそのとき引き抜いたのだ。なぜそういえるのか。それは、私の個人的な問題のしがらみには「神」の存在証明との戦いが常に付随していた。信者の前提には「神」の存在がある。これは統一教会関わらず、そうであろう。彼らは世の中の奇跡的な現象（シンクロニシティや癌が治ったなど）を担いでは、神のおかげだと必要以上にありがたがる。自分にとって都合のいいことが起きれば神に感謝し、都合の悪いことは、神の試練だと受け入れる（少なくとも私が見てきた旧統一教会の信者はそうだった）。「神」が存在するにしろ、存在しないにしろ、私にとってそのことが問題であるのではない。むしろ重要であったのは、私が「統一教会」という山を登らない論拠として、根底にある「神」へのスタンスを明確にする必要があったことである。それをニーチェという男が喝破したのだ。そして、その男はどうやら哲学者という分類の人種らしい。そこから哲学へとめり込むのに時間など要さなかった。

当然、とてもまともに中身を読めていたわけではないだろう。しかし、少なくとも哲学書なるものは、当時の私に「どこまでは<神>でどこからはそうではないのか」、そういう認識の輪郭を鋭く描く術を私に与えてくれた。そして、なにより重要であったのは、本を読む中で、その問題について自分の頭で考えるようになったことである。その思考の営みが、私を徐々に「統一教会」のしがらみから自由にしてくれた。盲信という名の精神の抑圧からわが身を解放し、考えることによる自由と開放感を与えてくれたのだ。

いまや、私にとって「統一教会」はもはやどうでもよい問題である。両親の幸せなひとときになっているのなら、それでいいとすら思っている。彼らの執拗な教えは、一方で親が子の幸せを願えば当然のことだ。そこに本当に愛情はあったのだろう。ただ、私にはそれがフィットしなかっただけだ。私は彼らを全く恨んではない。両親にすこやかな余生を暮らしてほしいと心から願っているのだから。長くなったがまとめると、哲学との出会いは私の人生を大きく変えてくれた。「統一教会」への仇討ちの人生が、「哲学」によって自由になったのだから。私はその恩人である「哲学」に恩返しをしたい。それが「哲学」で起業しようと思った1つ目のとても重要な動機である。

＜キャリア編：多くの企業はカルト化している＞

ここまでの話で、心情的に私が「哲学」で何かしたいと思うようになった経緯について、一定程度ご理解いただけたのではないだろうか。しかし、その手段としてなぜわざわざ起業を選んだのかは、まだ曖昧かもしれない。ここではその不明点について

【冒険のはじまり】

解説していきたい。まず、結論から言えば、世の中の多くの企業はカルト化しており、私が「哲学」によって救われたように、多くの企業も哲学的な術を活用できれば、その問題を解決できると思ったからだ。つまり、ビジネスが抱える組織的な課題解決にも「哲学」は非常に有効に機能するという可能性を感じた経験があるのだ。そこでまずは簡単にわたしのビジネスの経歴を紹介した上で、どのような考察から起業するに至ったのか説明していきたい。最初に略歴を記載しておこう。

<略歴>

2014 年：株式会社 mikan の創業

2016 年：株式会社リンクアンドモチベーション

2020 年：株式会社リクルート

2022 年：株式会社 ShiruBe の創業

では、略歴を追いながら、ビジネスにおける「哲学」の可能性を見出した経験について取り上げていこう。まずは、2014 年に学生 3 名で株式会社 mikan (<https://mikan.link/>) を創業した話からだ。最初にことわっておくと、この会社は現在も存在する。むしろ、とても調子がいい。行っている事業は教育事業であり、具体的には英単語アプリ「mikan」というものを一般向けに提供している。いまや 700 万ダウンロードを超えて、毎年受験生が使うアプリとして有名になっている。ビジネスとしてはとても順調だったし、当時もそうだった。学生起業ということで、メディアにも取り上げられ爆発的に伸びていった。

しかし、まだ未熟であった。どれだけ素晴らしいプロダクトを開発できても、組織が創れないと会社は経営できない。そんな当たり前のことに私たちは気付いていなかった。スタート当初は、自分達ならなんでもできると信じて疑わなかった。周囲の大人達もそう囃し立てた。しかし、すぐに綻びが生じる。それぞれに我が強いメンバーが集まると、当然ながら衝突する。チームは崩壊した。いや、わたしが逃げたのかもしれない。このままだと上手くいかないと思い見切りをつけた。(ちなみに今となっては当時の創業メンバーで集まって思い出話をするほど仲がいい)。

そして組織づくりを学ぶために 2016 年に組織コンサルティングの雄である株式会社リンクアンドモチベーション (<https://www.lmi.ne.jp/>) に新卒で入社することにした。2020 年に転職した株式会社リクルート (<https://www.recruit.co.jp/>) でもそうだったが、主に従事してきたことは、新サービスの立ち上げで、俗にいう HRtech と呼ばれるものだ。世間ではよく「エンゲージサーベイ」と紹介されている。これは企業の組織状態を数値で測るものだ。企業版のレントゲンといったところか。ここ数年は人的資本経営がトレンドで、どの企業も導入している。私が携わっていたころは、全くその流れはなくて本当に 0 からの立ち上げだった。いわゆるテレアポを一日 100 件以上かけて、そこからやっと 1~2 件の新規アポが取れる。10 件の新規アポがとれて、やっと 1 件の商談が成立するかどうかというシビアな世界である。地獄のような日々

【冒険のはじまり】

だったが、とても充実していた。私は営業に向いていたのだ。

それなりに成果を上げられるようになると、営業だけでなくクライアントに組織づくりのコンサルティングを行った。「ファクトとして経営理念のスコアが低い値が出ています。〇〇の研修をして改善しましょう」と偉そうに語った。目の前にいた企業の偉いオジさんたちは苦虫を噛み潰したような顔をした。経験の浅い若造が人・組織を語るのか？と言いたげだった。だが、「数値」化された、その結果の前に何も言えないでいた。彼らは正しかった。私は何もわかっていなかったのだ。ほどなくして、私は「数値」の限界を感じることになる。自分のチームのスコアが右肩下がりで悪くなっていくのだ。メンバーからは「上館さんは私たちを数値で操ろうとしている」と言われた。私は「数値」という名の「神」を盲信していたのである。私にとっての5点とメンバーにとっての5点の意味はちがう。人や組織は数値化しきれない、そんな当たり前のことを気付かされたのだ（誰だって偏差値だけで人として評価をされるのは嫌だろう）。あれだけ何かを盲信する者達を愚かな目で見ている「私」が、そこで私に対して同じような眼差しを向けていた。「数値」を盲信することで、本当に大事な何かを見失っていたのではないか。猛烈に反省した。私はこのとき、「哲学」への回帰というきわめて重要な経験をする。もう一度学び直そう。それまで培ってきた科学的な手法論ではなく、私が救われた哲学の力で人・組織に正面から向き合おう。そう思い直して、仕事に取り組んだ。そして気付くことになる。「多くの企業はカルト化している」のではないかということに。私は職業として多くの組織の問題を目の当たりにしてきた。そこで出てくる主要な問題を取り上げていくと、かなりの部分が幼少期から直視してきたカルト宗教（旧統一教会）の特性と類似していたのだ。簡単にまとめた次の資料をまずは見てほしい。

■ カルト宗教と企業の類似点

カルト宗教		企業	
1	疑ってはならない 理念	▶ 疑ってはならない 理念・パーパス	
2	絶対的な 主従関係	▶ 逆らえない 上司	
3	理解していない 教え	▶ 意味のない 研修	
4	生活を度外視にした 献金	▶ 生活を度外視にした コミット	
5	世の中と教会を対立させて 自己正当化	▶ 他部署と自部署を対立させて 自己正当化	

【冒険のはじまり】

1 から 5 までの項目を簡単に補足していこう。

1 つ目のカルト宗教の「疑ってはならない理念」というのは想像に難くないだろう。教祖が提示する世界観を否定することは、決してあってはならないことだ。一方で企業側の「疑ってはならない理念・パーパス」も同様の動きとして捉えることができる。

「パーパス経営の盲信」とでも呼ぼうか。ここ数年でどの企業も経営理念を「パーパス経営」を名の下に何千万円も投下して創り替えている。厄介なことに、それを創っている当事者は企業の経営陣なのだから、当然彼らにとって（だけ）わかりやすく、素晴らしいと思えるものになっている。そうして多額の投資をして経営陣が喜んでいパーパスを、現場の従業員は安易に批判することはできない（組織論としては、パーパスや経営理念の類を適切に従業員が批判・提言することが健全であるとされている場合が多い）。つまり、構造的に盲信を強制する動きが企業内でとられるのだ。私が親から受けた教育とそれは重なった。

2 つ目はカルト宗教における「絶対的な主従関係」である。宗教内で教祖に逆らうことは、神への冒瀆となり、ご法度である。そこまでのレベルではないとしても、企業内でよく見る「逆らえない上司」との関係には、通底するところがある。違和感を覚えて意見しようものなら、査定に響くリスクがある。当然ながら、全ての上司がそういうわけではない。できた上司は、柔軟に部下の意見を吸い上げながら組織をマネジメントしている。しかし私が見てきた多くの企業では、そういう動きができない上司が多く存在しており、大抵の場合に組織問題の根本的な原因の一つになっているのである。

3 つ目のカルト宗教の「理解していない教え」というのは、普段から接触機会がない人にとっては意外なことかもしれない。私は幼少期から、大きな違和感をここに覚えていた。彼らは習慣的に教典を読み涙している。しかし、その教典の意味を聞いてもいまいちピンとこないのだ。「あなたの言葉で説明してみてください。例えば、具体的な事柄で言い換えるとどういうふうに説明できますか？」とよく聞いていた。多くの場合、そう質問すると嫌な顔をされた。この子には「悪魔」が入ったのではと心配されていたのだ。私の目には場に依存しているように見えた。つまり教えそのものを学びにきているのではなく、そこで集まる仲間の繋がりや承認を求めているように見えたのだ。これについては、企業でも似たようなケースを見てきた。リンクアンドモチベーションでもリクルートでも研修を実施してきた身からすると、その多くが「意味のない研修」に成り下がっていると思われる現象を目の当たりにしてきたのだ。多くの場合、研修の場では有り難がってはいるが、翌日にはほとんど忘れていく。出席することが目的化していたり、久しぶりに会う同期と終わったあと飲みに行くことが楽しみで来ていたりする。もちろん全てがそうとは言わないし、それを頭ごなしに悪いことだとは思わない。しかし、多くの場合、非公式な目的の優先度が高く、手段が目的化しており、その様子が私にはカルト宗教と重なった。

【冒険のはじまり】

4 つ目、カルト宗教といえばこれ、というイメージだろう。「生活を度外視にした献金」である。私の両親もご多分に漏れず多額の献金をしていた。自己破産して倉庫みたいな家で暮らしていたこともあるので、かなりの額を借金していたのだろう。周りの友達を買ってもらっていたものを、私は持っていなかった（見かねた祖父が工面してくれるようになって改善したが）。企業においては「生活を度外視にしたコミット」が散見される。若手の頃は「死ぬまでやれ、死なないから」と言われてオフィスに泊まりながら仕事をすることもあった。それが全て悪いことだとは思っていない。現に私は当時身につけた新規の営業開拓力や組織コンサルティング力によって、生計をたてられている。しかし、あれが万人にとって良いことだとは思えない。多くの人の心が病んでいくのを見ていたからだ。物事には限度がある。それを度外視にして何かを捧げることは、いずれにせよ不健全である。

5 つ目のカルト宗教の特徴は、「世の中と教会を対立させて自己正当化」である。私の両親はよくニュースで、芸能人の不倫問題や企業の不正が報道されると「見てみろ！世の中は間違っているだろ？（だから我々は正しいのだ）」と幼い私に言い聞かせた。企業内でも似たようなことが頻発する。「営業チームは数字にしか興味ない。無理難題を俺たち開発チームに押し付けてくる。」「開発チームは現場の実態を分かっていない。お客さまの要望やクレームを直接受け止めているのは俺たち営業なんだ。」どちらも間違っているわけではないだろう。しかし、二元論で捉えると問題は深刻化する。どちらも間違っていないからこそ、どちらにとっても良い状態を探求する必要がある。しかし、カルト化すると自分が絶対的に正しくなり、他方が見えなくなることでこうした探求の姿勢を失ってしまう。

ここまでカルト宗教と企業の類似点を挙げてきた。まとめると双方に通底するのは、何かを絶対視して思考停止であり、探求の喪失とも言える事態である。それがあらゆる問題のトリガーとなるのだ。ゆえに私は、今こそ企業に「哲学」が必要なのではないかと思うに至っている。さらに言えば、「哲学する」ことが必要なのだ。具体的にはこれまでの当たり前をもう一度吟味し直す姿勢や対話によって共に意味を探求する行為とも言えるかもしれない。私は少なくとも「哲学」によって盲目的に何かにすがることによる弊害を回避することができることを確信している。よって「哲学」に「恩返し」にしとどまらず、「哲学」の実践による「ビジネスの可能性」も確信できたことが、2022 年に起業することへの大きな決め手となった。

② 現在編：いま「哲学」で何をしているのか？

ここでは弊社の現状について「誰が、何を、どのように」企業に対してサービス提供しているのか 3 つに渡ってご紹介していこう。具体的には次に示す内容をガイドラインとしていく。

【冒険のはじまり】

<誰が：弊社のチーム紹介>

<何を：サービスの目指す状態>

<どのように：サービスの概要>

ただし、弊社は立ち上がったばかりのベンチャー企業である。常に状態はアップデートし続けており、それこそサービス自体も1ヶ月単位で変わっていく。実験精神で常に変わり続けることをサービスにもメンバーにもそして私自身にも求めて運営していることをご留意願いたい。

<誰が：弊社のチーム紹介>

私の自慢の仲間について紹介させてほしい。資料を下記の資料をご覧ください。
(今回は哲学研究者だけを紹介するが、他にも多くの最高の仲間が在籍している)

■ チーム紹介



東京大学 教授 梶谷 真司

専門は哲学、医療、比較文化。身近な問いから哲学的な問いに至るまで世の中のあらゆるものごとを自由に考え、追求する「哲学対話」を日本で広めた第一人者。



上智大学 特任助教 梅田 孝太

専門は哲学、倫理学。数々の学会で研究成果を発表しながら哲学対話などの活動も広く行う。2022年9月に「講談社現代新書100」の第一弾として著書を発表。



高千穂大学 准教授 小平 健太

専門は哲学、美学、倫理学。ドイツの名門チュービンゲン大学へ留学し本場の哲学を学ぶ。第一回ハイデガー・フォーラム学会賞「渡邊二郎賞」受賞。



東京大学 特任研究員 堀越 耀介

専門は教育哲学、哲学プラクティス。企業や教育機関での哲学対話、社員研修やバーパス設計の哲学コンサルティングを行う。



(C) 2023 ShiruBe

全員創業初期のタイミングから一緒に会社やサービスを創ってくれている。素晴らしいメンバーと挑戦できていて、私はとても幸せである。最初は本当に何もなかった。最初に出会ったのは梅田さんだった。その時は「哲学で世界を変えましょう！」といかにも怪しいパッションだけで誘った。自分で言うのもなんだが、よく協力してくれたと思う。昨年の6月頃に投資家から4,100万円資金調達したので、そこからは雀の涙だが頑張りやに報いることができ始めた。それまでは怪しさしか無かったと思うが、それでも初期から協力してくれているこのメンバーには感謝してもしきれない。弊社に関わるメンバーには新しい挑戦というやりがいだけでなく、しっかりと経済面でも豊かになってほしい。もちろんそれだけではないが、経済的な制約があると人は精神

【冒険のはじまり】

的にかなり追い込まれる。私は綺麗事だけでは済ませたくないのだ。

成長やお金という、もしかしたら拒絶反応がある人もいるかもしれない。それでも社長としてそこから逃げてはいけないと思っている。弊社と共に活動することで具体的に生活がよくなる。好きな人にちょっと良いカッコだってしてほしい。その生活の基盤の上で、一緒に行く活動の意義を誇らしく語ってくれたらとても嬉しい。これまで少なからず研究者の実態を耳にしてきたが、才能豊かな人たちの活躍の場を我が国は用意しきれていないように思う。私がある場を創る担い手になっていく所存だ。

そんなチームと関わる上で大切にしていることが3つある。1つ目は「質実剛健」である。ベンチャー企業という、煌びやかに何か新たなことを生み出そうとしているイメージがあるかもしれない。もちろん、その側面もあるだろう。しかし、それが目的化してはならない。つねに本当に大事なことが何か考え続けることを大事にしたい。それがたとえ泥臭いことでも、大事なことから目を離さず向き合うことを大切にしている。

2つ目は「率先垂範」である。人に言うならまずは自分からやってほしい。誰かが持ってきたアイデアに口だけ出すのは簡単なことだ。まず0からアイデアを形にすることが大事だ。私はそれがどれだけ不恰好でも、心から感謝したいと思っている（当然ながら適切なフィードバックは行う）。何より自分は傷つかないところから口だけ出す人はとても嫌いだ。

3つ目は「キューティーファニー」である。可愛げを持って楽しみながら関わることをとても大事にしている。ビジネスというものは、どこまでいっても人同士の関わりだ。関わりたいとお互いに思える態度はそもそも人として重要だと思っている。変に斜に構えたり、賢ぶったりして人と接しても、相手に不快な思いをさせるだけだ。これはオープンなコミュニケーションを強いているわけではない。人と接する上でそういう価値観を大切にしてほしいという願いである。当然ながらコミュニケーションが取るのが得意な人もいれば苦手な人もいる。状態によっては適切に振る舞えることもあれば、そうできない瞬間もある。それでも心構えとして「キューティーファニー」であることを大切な価値観として共有しておきたいのだ。

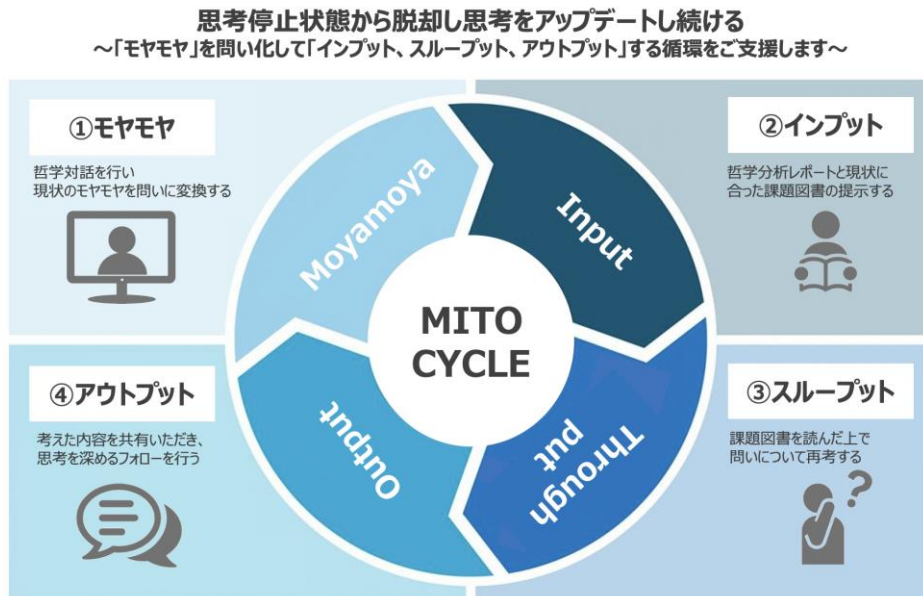
※もしこの考えに共感いただける方いたら、連絡してきていただきたい。いつでもウェルカムである！

<何を：サービスの目指す状態>

ここではサービスの目指す状態について概説していこう。注意していただきたいのは、会社の目指す世界観ではないということだ。それは最後の「③未来編：今後「哲学」でどうしていきたいのか？」で示している。あくまで我々が提供するサービスでユーザーがどのような状態になるのが理想としているのかを提示するということだ。それではご紹介しよう。まずは次に示す資料を見てほしい。

【冒険のはじまり】

■ サービスの目指す状態



(C) 2023 ShiruBe

これまでの内容を踏まえながら補足していこう。私は経験上、人間が思考停止状態になることを問題視してきたカルト宗教であれ、企業であれ、その状態は不健全だということを体験してきたからだ。言い換えると、常に自分自身の考えがアップデートし続けている状態が理想である。もっと言うと、思考を抑圧している「こうあるべきだ！」という規範を見直して、そこに囚われることなく自由にのびのびと考えることができる状態を、サービスを通して提供していきたいと考えている。そのために創った思考のフレームワークがこの「MITO CYCLE」である。これには4つのステップがある。

ステップ1：Moyamoya(モヤモヤ)

これまでの習慣の中で違和感や生き苦しさを感じているが、目を背けてきたことをまずは言語化するということだ。主に哲学対話を応用した形式で実施している。実施後は自分が今後考えていきたい問いを必ず出してもらっている。

ステップ2：In put(インプット)

次に、言語化された内容に対して、思考を進めるために客観的に対話内容を分析したレポートの提供やおすすめの本を提供している。自分なりの経験で考えるのではなく、他者の視点を適切に活用しながら深く考えることができる準備をしてほしいのだ。

ステップ3：Through put(スループット)

インプットすることで得た新たな視点をもとに、再度ここで考えてもらう。別の視点

【冒険のはじまり】

を持った自分が、そうではなかった時に出した問いに対して答えを出してもらおう。

ステップ4：Output(アウトプット)

スループットした内容を言語化して共有してもらおう。そこに対して我々が問いを投げかけたり、参考になる知見を提供する。

これらのステップを経ると最初の問いが変容して次の問いのほうへ移り変わっていく。問いが変わるということは、すなわち思考がアップデートされているということだ（少なくとも現時点ではそう定義してサービスを開発している）。

※ちなみに MITO にはイタリア語で「神話」という意味がある。自分が信じ込んでいたもの(神話)を覆して思考をアップデートしつづけてほしいという願いも込めている。

<どのように：サービスの概要>

ここまでで、サービスの目指す状態についての理解は進んだのではないだろうか。ここからはそれを実現するために具体的にどんなサービスを提供しているのかを紹介したい。ただし、既述の通り、サービスは常にアップデートし続けているため、数ヶ月で大きく変わる。また、内容によってはクライアントの機密情報も関わるため、全ては開示しきれないことを最初に念頭においていただきたい。それでは現在、企業向けに提供しているサービスについて紹介していく。まずは資料を見てもらいたい。



「哲学コーチング」と「哲学対話」は実質的には「企業向けにカスタマイズした哲

【冒険のはじまり】

学対話」をおこなっている。「哲学コーチング」は主に企業のエグゼクティブ向けに哲学研究者が 1on1 の対話を行なっており、「哲学対話」では 5-15 名程度のチームで哲学対話を行う。それぞれ対話を行うだけでなく、独自のワークショップを織り交ぜている。ただし、それではこれまでも同様のことをおこなったことがある哲学プラクティショナーの方もいらっしゃるかもしれない。ここでのこだわりは、弊社独自のケイパビリティとして、対話内容を哲学的に分析してレポートを提供し、その分析内容に合わせて推薦図書まで紹介していることだ。

提供物

レポート

働く人の悩みを哲学的に分析



課題図書

現状の悩みに合った課題図書を提示



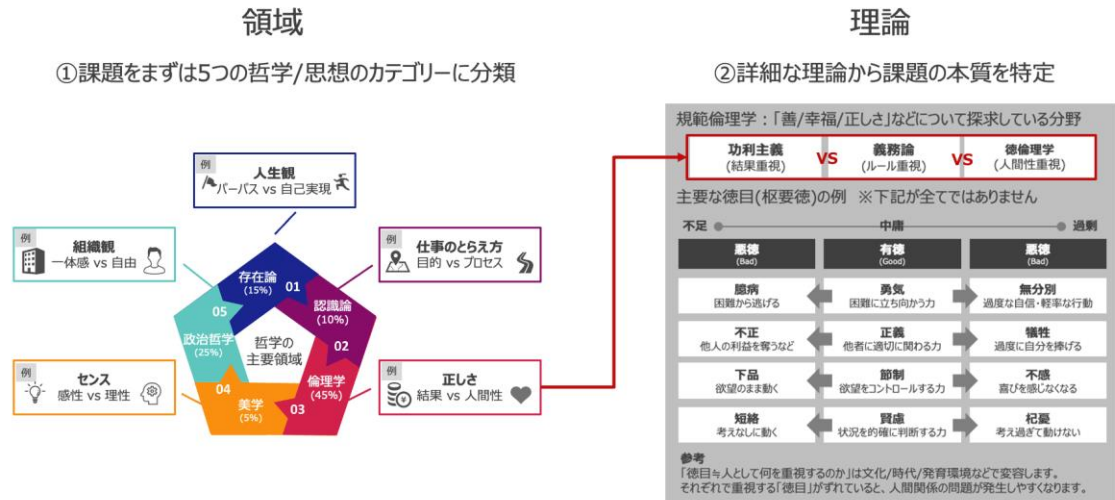
(C) 2023 ShiruBe

このレポートはこれまで 100 件以上創り込んできた。結果として、現在では対話内容の主要なテーマに対してどのような分析が可能か、ある程度パターンも見えてきた。

【冒険のはじまり】

データベースから見えてきた分析パターン

哲学/思想の違いを相互理解し本質的な課題を特定することが重要です



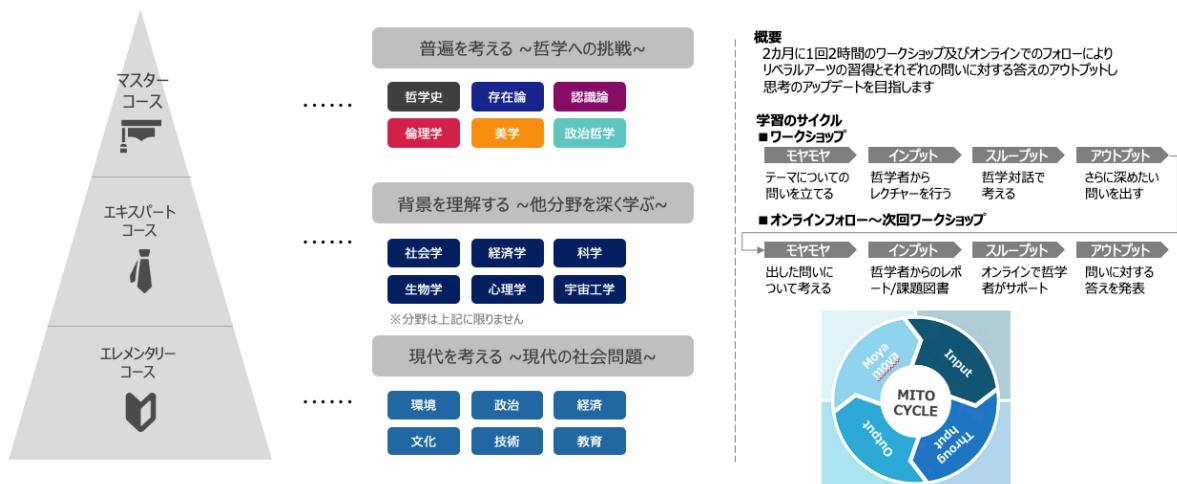
(C) 2023 ShiruBe

レポート作成の知見やツールを活用した効率的な作成体制も整ってきたので、これからチャレンジしてみたい方は是非お声がけいただきたい（2回目のお誘い）。

最後にリベラルアーツプログラムも少しだけご紹介しておこう。

リベラルアーツプログラム：

リベラルアーツのレベルに合わせて3つのコースがごございます
それぞれ12ヶ月間で実施する内容となります



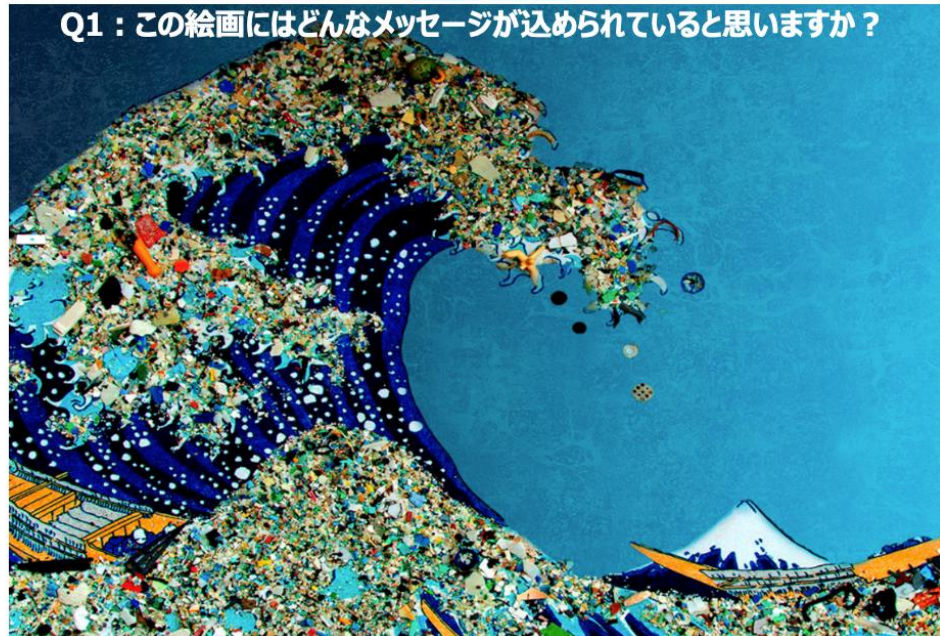
(C) 2023 ShiruBe

エレメンタリーコースからマスターコースまでの3コースを用意している。それぞれ12カ月のプログラムだ。このプログラムの中でも前述したMITO CYCLEをしっ

かりと回してもらえのように仕立てている。一部だけコンテンツを紹介しよう。

リベラルアーツプログラム：具体例

環境



(C) 2023 ShiruBe

リベラルアーツプログラム：具体例

環境

Q2 : SDGsって誰のためのもの？

インプット

日本の取り組みの例も見てみよう



海洋環境 (Goal 14)
海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する

14 海の豊かさを
まもろう

[illegible]

SDGsって一体誰のためのものだろう？

chrome-extension://efaidnbmnnnlpcapj
cgiciefndmkaj/https://www.mofa.go.jp/m
ofaj/gaiko/oda/sdgs/pdf/SDGs_pamphlet
.pdf

 外務省

 外務省

持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）とは、2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の
後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載され
た、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一
人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っています。SDGsは発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサ
ル（普遍的）なものであり、日本としても積極的に取り組んでいます。

「地球上の誰一人取り残さない(leave no one behind)」…
——「これって一体、誰の立場から言われているの？」

「発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサルなもの」…
—— 環境問題が「普遍的」(誰でも・どこでも・いつでも、当てはまる)
そう言える根拠はなんなの？

Q3：自然にどう関わるのが人間にとってよいのか？

～哲学対話で考える～

スループット



| 新海誠『天気の子』(2019) / 宮崎駿『風の谷のナウシカ』(1984)



「自然」はこれまで様々な仕方で描かれてきた。

どんな表現の仕方や
変化があったのだろうか！

購買「私たちは世界のかたちを決定的に変えてしまった」



- ◆ 自然(地球そのもの)にとって人間は**不要な存在者**?
- ◆ 自然は人間にとって**支配の対象**?
- ◆ 人間にとって**恐惶の対象**?
- ◆ 人間の決して**手の及ばないもの**?
- ◆ それとも人間も自然の一部なの?

Q4：自然にどう関わるのが人間にとってよいのか？

～自分なりの答えと今後さらに考えてみたい問い～

アウトプット



自然への関わり方：～～
今後考えてみたい問い：～～

→後日レポート&課題図書を提供。次回プログラムで問いへの答えを発表

ここまで弊社の現在についてできるだけ包み隠すことなくお伝えしてきた。最高のメンバーたちのおかげで、下記に示すように実績もともなってきた。

■ 導入企業

ナショナルカンパニーとの商談が進んでいます

ENT



PERSOL



パーソルキャリア

SME



原田産業株式会社



DENTSU CROSS BRAIN

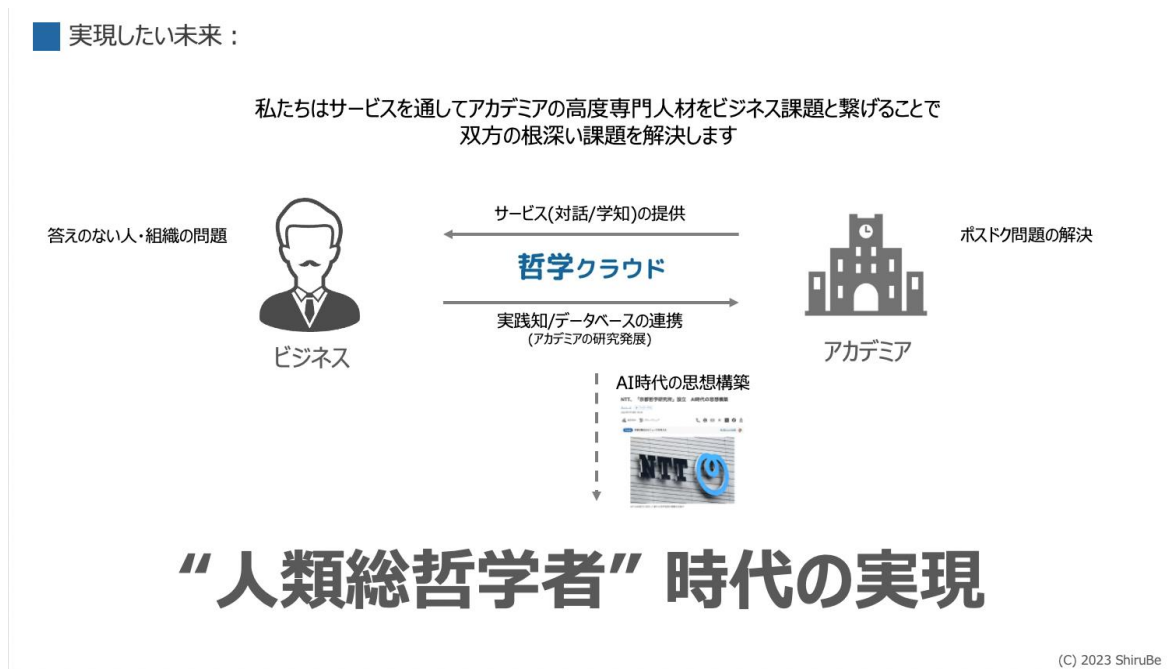


(C) 2023 ShiruBe

もし少しでも興味ある方はぜひご連絡いただきたい！（3 回目のお誘い）これからどんどん仲間を迎え入れていきたいと思っている。もしかしたら、ここまででいろいろと真新しいことをおこなっている印象があるかもしれない。そんなやったこともないことに片足を突っ込むのは、リスクを感じてしまうかもしれない。だが、安心してほしい。我々はサービス設計の前提として、研究者がこれまで培ってきたケイパビリティを生かすことを大切にしている。つまり、日ごろ授業で提供している内容を我々が企業向けにカスタマイズしたり、哲学対話のファシリテーションも基本的なやり方を企業向けにやりやすいように類型化しているのだ。最初はできなくて当たり前なので、大丈夫だ。実際にサービスを提供する際には私や経験者が同席して、独り立ちできるまでサポートする（現状でも全てのサービス提供で私がフォローに入っている）。当然ながら前述したチームへのマインドは大切にしてほしい。サポートはするが、自己変革が必要になることも多分にあると思う。それでも少しでも面白そうと思ったら連絡してきてほしい。お茶でもお酒でも飲みながら語らいたい。（4 回目のお誘い）

③ 未来編：今後「哲学」でどうしていきたいのか？

さて、最後にこれから目指す未来について紹介して締めくくりたいと思う。つまり私が実現したい世界観とも言い換えることができるだろう。一言でいうと、“人類総哲学者”時代の実現である。この意味するところは、全ての人が何かの規範や価値観に縛られて思考が抑圧されて過ごすのではなく、自由にのびのびと考えて生きていける社会だ。



別にになにかやりたいことがなくてもいい。何にでも目的を設定しなければならないという強迫観念を持つ人が多いが、それも何か成し遂げるための1つのルールモデルでしかない。そういう現代人がある意味縛っているものをすべて解体していきたい。その上で、次世代にむけて新たな思想を創り上げていきたい。そのために、西洋思想も東洋思想も現代思想も、全て取り入れていきたいと思っている。哲学だけに限らず、他の領域とも連携する。アカデミアの方だけを見るのではなく、それをビジネスの現場で適用することで、新たな知見を育んでいく。そうして今まで混ざることのなかった知見をブレンドしていき、多くの人が自由にのびのびと考えていくことができる思想的な土台をつくりたい。そのためにあらゆる知見が融合していくエコシステムを創る。その中心的な役割として全体を駆動させるエンジンをこの会社は担っていく。次世代をリードする思想を我々が生み出すのだ。

そんな試みに少しでもエキサイトしてくれるなら、私と話そう！強引に勧誘することはない。研究活動は全力で応援する。それはぜひ続けてほしい。もし生活のために無理して非常勤の仕事やバイトをしているなら、それはやめてほしい。魂が削れていく。やりたくもないことをやっていては、せっかくの人生が無駄になってしまう。何より、あなたの才能が勿体無い。私にその才能の一部を託してほしい。一緒に挑戦することで、道はひらけていく。当然、茨道もあるだろう。時には嫌になることも、ムカつくこともあるだろう。それでも信じてほしい。最高に楽しい活動ができるのだということを。最高にやりがいのある事業になることを。そして共にエキサイトしてい

【冒険のはじまり】

こう！一緒に新たな道を切り開いていこう！私たちが通った道が轍となる。これからの後輩達のためにも、これから的人类のためにも、あなたの力が必要だ。5 回目のお誘いはここまでにしてそろそろ筆をおこう。それでは！